

5～11歳小児への新型コロナワクチン接種に対する考え方

青山小学校 校医

おの医院 小野恭一

オミクロン株による新型コロナウイルスにより今まで少なかった小児への感染が急拡大しております。学校ではどうしても密になり、手洗い、うがい、マスクの励行、部屋の換気を十分行っても集団発生が懸念されています。1月21日に5～11歳の小児に対する新型コロナワクチン接種が認可され3月以降に接種が開始される予定です。児童に接種について現時点での一つの意見として接種の際の参考にしていただければと思います。

小児科学会の提言として、基礎疾患のある子どもへのワクチン接種は重症化を防ぐことが期待されるので健康状態に合わせて接種をお勧めしております。ただ、健康な子どもへのワクチン接種は、意義を認めるものの、メリット（発症予防等）とデメリット（副反応等）を理解して対応してくださいとしております。あまりよくわかりませんね。

ワクチン接種に関して日頃より個人的効果と、集団（社会）的効果の2つから考えるようにしています。まず、個人的な効果ですが、小児の新型コロナウイルス感染による症状は、高齢者と異なり多くは軽症、無症状のいわゆる風邪症状です。インフルエンザのほうが脳症など重症化する可能性が高くもっと注意を要します。1月4日現在、これまでの日本国内の小児新型コロナワクチン感染者数は10歳以下で110,353名（重症1名、死亡0名）、10～19歳で207,507名（重症0名、死亡3名：基礎疾患あり）です。海外では5～11歳への小児への発症予防効果は90%以上と報告されています。ただ成人への接種で発症予防効果のある期間は短いことがわかり、現在3回目接種が進められています。副反応ですが小児に米国で約870万回接種され発熱が1回目の接種後に7.9%、2回目接種後に13.4%に認められています。さらに11名の心筋炎の報告があります。個人的効果ではメリットが少なく、デメリットが多いように感じております。

集団的効果ですが、ワクチン接種により短期間ですが発症予防効果があります。終生免疫ではありません。インフルエンザワクチンと同様に考えて、集団発生は完全に抑えることはできませんが流行を緩やかにすることは可能かと思えます。そのことにより医療への負荷が軽減され高齢者、基礎疾患を有する人の死亡者（新型コロナウイルス以外の疾患の死亡も含めて）が減少すると考えます。

小児への新型コロナワクチン接種を多くの人にしてもらうことで、成人の死亡者を減らすことができることが小児にワクチン接種する意義です。接種した小児には、しばらく新型コロナワクチンにかかりにくいメリットがあります。ただ接種せずにかかったとしてもほとんどが無症状か風邪症状です。接種のたびに発熱と非常に少ないですが心筋炎を引き起こす可能性があることがデメリットです。

オミクロン株に限って考えをまとめただけで、今後新型コロナウイルスが変異を起こし、小児でも重症化する可能性もあります。ただ、重症化を引き起こすようになったウイルスに今のワクチンに効果があるのか、まったく効果がないのかもわかりません。一つの考え方として接種するにあたり参考になれば幸いです。